

重複発話現象に基づくターンテイキング理論の見直し

～ 日本語地図課題対話を通して ～

榎本 美香

千葉大学大学院自然科学研究科 情報科学専攻

263-8522 千葉県 千葉市 稲毛区 弥生町 1-33

enomoto@icsd4.tj.chiba-u.ac.jp

2人以上の対話において、1人の話し手が話し終わる前に次の話し手が話し出す、ということはよく起こる。しかし、従来のターンテイキング理論では、現在の話し手が話し終わってから次の話し手が話すという枠組みしか設けられておらず、これでは現実に生じている現象を説明しきれない。そこで、日本語対話コーパスで2人以上の話者が同時に存在する箇所を調べ、その特徴ごとに以下3つの分類を行った。(1)現在の話し手が次の話し手に話すよう誘引しているもの(2)あいづちのように挿入句的なもの(3)次の話し手が現在の話し手を遮るもの、である。これらの分類を基に、ターンテイキング理論の補足理論としての介入発話モデルを構築した。

Turn Taking and Overlapping in the Japanese Map Task Dialogue

Mika Enomoto

Doctoral Program, Information Science

Graduate School of Science and Technology of Chiba University

1-33, Yayoi-cho, Inage-ku, Chiba-shi, Chiba, 263-8522, Japan

enomoto@icsd4.tj.chiba-u.ac.jp

In conversations involving two or more persons, one speaker often tries to take a turn while another, preceding speaker is still talking, and not rarely he or she successfully takes his or her turn. These are the cases of overlapping utterances, or overlaps. Currently available theories about turn-taking assumes that next speaker is only allowed to start talking after current speaker stops and hence can not account for this fact. The model proposed in this paper complements them with rules that explain three types of overlaps observed in the Japanese Map Task Corpus: namely (1) interruptions invited or induced by current speaker, (2) backchannels by the next speaker and (3) overlaps that are strategic.

1 はじめに

対話コーパスの興隆に伴い、対話において2人以上の参加者が同時に発話している現象が従来の研究に比べ予想外に多いことが明らかになってきている。この現象は話者交代のメカニズムを考えるにあたり、非常に重要な位置を占めている。そこで本研究では、「相手話者発話中の発話開始現象」、すなわち「重複発話現象」(以下オーバーラップ)に焦点を当て、その対話中でのストラテジーを明らかにするとともに、Sacks, Schegloff & Jefferson (1974)が提唱しているターンテイキング理論である会話の順番取り規則を見直し、その改修を目的とする。

Sacks, Schegloff & Jefferson (1974)[1]による会話の順番取り規則における問題点としては以下の2点が挙げられる。

(1) 会話の順番取り規則はオーバーラップが対話の中では稀少であるとの前提から、この現象を度外視、例外視した規則である。そのためこの規則では、オーバーラップによる話者交代がどのようなシステムで発生するのかを表現できていない。

(2) 会話の順番取り規則に則れば、現在の話し手が次の話し手を指定する、もしくは発話を停止するという行為によってのみ次の話し手は発話することができるのであり、この行為によってターンテイキングが統制される。この規則では、話者交代を管理する権利があたかも現在の話し手に置かれているかのごとく描かれている。しかし、オーバーラップの発生したターンテイキングにおいては、むしろ次の話し手の方に話者交代の箇所を選択する余地がある。

ターンテイキング理論がどのような対話であろうと処理できる規則として機能するためには、オーバーラップ現象を対話の一構造として取りこむ必要がある。この報告においては、日本語地図課題対話を通して観測されるオーバーラップ現象を取り上げ、この現象にまつわるターンテイキングにはどのようなものがあるかを検討した。この観測結果を下にして上記の問題を解決するために、会話の順番取り規則の補足ルールとして介入発話モデルを提唱した。

2 ターンテイキング理論とその問題点

一般的に、対話は話者交代によって特徴付けられる。例えば、2者の対話の場合、現在話し手の役目を果たしている者(現発話者,A)が話し止めると、

今まで聞き手であった者(次発話者,B)が話し手にまわる。そして次発話者が話し止めると、また現発話者が話し始める、という具合にA-B-A-B…と話者が順番に交代するという参与フレームが存在する。

この対話の順番取りは幼児期のごく初期にも見られるが、子どもどうしの対話には、オーバーラップがよく起こる(Ervin-Tripp, 1979[2])。ところが、大人どうしの対話になるとオーバーラップは全体の5%未満になり、もしあったとしても非常に短いものだと言われている(Jaffe & Feldstein, 1970[3])。

これらの結果から、Sacks, Schegloff & Jefferson(1974)は対話にはオーバーラップを最小化するようデザインされたテクニカルなシステムが機能しているに違いない、と考えた。すなわち、対話集団の人数、対話への参加者の出入り、発話の長さなどに関わらず処理できる局所的会話管理システム(local management system)が存在しているはずであるとSacks(1974[4])は考えた。

2.1 Sacksらによる会話の順番取り規則の提唱

Sacks, Schegloff & Jefferson (1974)は話者交代を統制するメカニズムとして以下のような理論展開を図っている。まず、話し手は順番構成単位(以下TCU)と呼ばれる潜在的なターンの単位によって話している。この単位はターンをつくることができる成分で、一単語から節・名詞句・文といった統語単位であり、音韻やイントネーションによって識別される。そして、それぞれのTCUの終わりに会話の順番移行が適切となる場(以下TRP);現在の話し手が話し止められる箇所、話し止めるべき箇所があり、そこで話者交代が起こるとする。これを会話の順番取り規則として次の規則に則って作動する(参照Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974; Levinson, 1983[5])。

(ルール1) 最初のTRPにおいて、

(a) もし現在の話し手が次の話し手を指定するならば、その選ばれた相手は次に話す権利と義務を持ち、話者交代はそこで起こる。

(b) もし現在の話し手が次の話し手を指定しないならば、最初に話し出した人が発話権を得、話者交代はそこで起こる。

(c) もし現在の話し手が次の話し手を指定せず、他の参加者も話さないならば、現在の話し手は話し続けることができる。

(ルール 2) もし最初の TRP において 1(a),1(b) が作動しなければ、1(c) によって現在の話し手が話し続けている。そのときは話者交代が生じるまで、ルール 1(a)-(c) の規則は繰り返し次の TRP で再適用される。

この規則に則れば、話者交代は TRP でのみ生じることになる。オーバーラップを最小にするために、現在の話し手は隣接ペアの前半部分である addressed question, *What? Who?* などを用いた question intonation や *You know? Don't you agree?* などの tag question を用いて次の話し手に TRP の存在を知らせ、次の話し手に話すよう指定する。従って、オーバーラップを伴わない話者交代がスムーズに行われることを説明できる、とされてきた。

しかし、オーバーラップという現象を例外視したために会話の順番取り規則は自然な対話に存在する多くのオーバーラップのもつ戦略的な機能を説明し損ねていると Clark は指摘している (参照 Clark, 1994[6])。日本語地図課題対話においてオーバーラップの占める割合は、全発話中の 45% にも上り、対話システムを考えるにあたり決して度外視できない機能であることが示唆される (岩他, 1998[7])。

2.2 その問題点

Sacks, Schegloff & Jefferson(1974) によれば、オーバーラップは TRP にのみ出現する、とされていた。しかし、日本語地図課題対話を調べたところ、オーバーラップはもちろん TRP 付近にも出現していたが、TRP ではないところ、発話の中ほどにも出現していた。その例を以下に示す。

例 (1)

A: -あばっちぞくのむ*らてある
B: *ああはいはいあるある

*はオーバーラップの開始地点を示している。

この例では単語の途中でオーバーラップが出現している。従って、addressed term, tag question などの付加によって起こる TRP の誤解であるという考え方はあてはまらないだろう。

もし、会話の順番取り規則によって説明できないターンテイキングのあり方があるとするれば、それはオーバーラップによって生じる話者交代である。オーバーラップは対話中のどこに生じるかに

ついて、Levinson(1983) は会話の順番取り規則のオプションとして以下の考察をしている。それによれば対話中のオーバーラップは、次の 3 つの箇所が生じる。まず、会話の順番取り規則 1(b), 1(c) のオプションとして、2人以上の次の話し手が発話権を得るために話し始めようとしたときに起こる。また、会話の順番取り規則 ルール 1(a) のオプションとして、現在の話し手が次の話し手を指定するかのよう addressed term や tag question を付加したときに、TRP が誤解されて起こる。そしてこれら以外では、暴力的介入によるものがあるとされている。

しかし Clark(1994) が描き出したオーバーラップに関係する対話ストラテジーを見ても以下の 5 つがある。(1) Acknowledgements; 現発話を聞き手が承認する単位の終わりにオーバーラップする。(2) Collaborative completions; TCU の途中で意図的に対話者が変わる。(3) Recycled turn beginnings; オーバーラップしたほうの話し手は、先の話し手が注意を払うように、話し始めを明瞭に繰り返す。(4) Invited interruptions; 現在の話し手が聞き手に、TCU の終わりでなくとも理解したら遮るよう促す。(5) Strategic interruptions; 次の話し手が適切な理由だと考えたところで現在の話し手の発話を遮る。

従って、オーバーラップ現象を単に会話の順番取り規則内での誤解や暴力的介入として位置付ける限り、現実の対話に即した会話理論を構築するのは難しい。ターンテイキング理論がどのような状況であろうと処理できる対話プロセスを説明したものであるならば、このようにさまざまな対話者間のインタラクティブな発話のやり取りに関わるオーバーラップ現象を内包したものでなくてはならない。

そこで本研究では、対話のターンテイキングに深く関わっていると考えられるオーバーラップ現象に焦点を当て、その対話中でのストラテジーを明らかにするとともに、Sacks, Schegloff & Jefferson(1974) が提唱しているターンテイキング理論である会話の順番取り規則を見直し、その改修を目的とする。

3 観察

3.1 観察対象

観察の対象としたのは日本人話者による地図課題対話コーパス中の 8 対話である。この対話コー

パスは、2人の実験参加者により地図課題を共同して達成するための対話データ128対から成る。各参加者には1人一枚ずつ地図が与えられ、出発地点から目標地点までのルートが描かれている地図を持つ対話参加者が、ルートの描かれていない地図を持つ他方の対話参加者にそのルートを言語情報により指示して描かせる。2人の持つ地図上には若干異なる指標物が含まれており、お互いの地図情報を相手に伝達することでルート記入を正確に行うことを目標としている。千葉大学では1994年以来、地図課題による対話を収録してきており、発話の開始終了の時間は正確に記載されている(堀内他,1999[8])。特に、転記テキストだけではなく、実験参加する2人の音声を分離して随時聞くことが可能な形にコーパス及びツール類が整備されているので、オーバーラップという現象についての実証的研究を行うのに適している。また、間仕切りのある防音室での録音という若干人工的な環境に参加者は置かれているが、2人の話者が課題の達成に集中することによって、対話自体を目的としないため、対話そのものは自然で自発的なものが収録されている。このことから、自然な対話におけるオーバーラップ現象を扱うのに適した題材である。

3.2 手続き

オーバーラップによってどのような話者交代が行われているのかを明らかにするためには、対話機能の中でオーバーラップがどのようなときに使われているかを調べる必要がある。先に挙げたClark(1994)の分類に従えば、5つに分類される対話ストラテジーがオーバーラップの発生時には存在するとされる。

そこで、Clark(1984)の指摘を参考に、日本語地図課題対話の8対話において出現したオーバーラップを分類した。評定者は千葉大学の学部生6人である。1施行、3人の評定者が4対話についての分類を別々に行うこととし、全部で2施行を行った。評定者は、作業前に上記の5分類について、分類定義の説明を受け、用語や手順について誤解がないよう実際にいくつかの事例について分類を行った後、本施行に移った。このとき転記テキストだけでなく、音声ファイルを必ず聞くようにとの指示を行った。

4 結果

評定の結果、Clark(1994)が指摘していないオーバーラップがあがった。またオーバーラップの分類を行うにあたってClarkの説明が不適切・不十分であるため評定者によって意見が分かれるものがあがった。対話ストラテジーとしての分化にも、対話での機能と形態上の混同が見られた。例えば、Recycled turn beginningsは形態上の分類であるが、他の機能的な分類—Acknowledgements, Collaborative completions, Invited interruptions, Strategic interruptionsを同時に併せ持っているなどカテゴリー水準の統一性がなかった。そこで、今回は対話中でのオーバーラップの機能面だけに焦点を絞り、Clarkの指摘を参考に、日本語地図課題対話におけるオーバーラップを分類することで、その対話中での働きを調べることにする。

この新しい分類に基づいて再び評定を行ったところ、評定者間の一致率は3人では61.8%、2人では88.6%であった。このように複数の評定者による評定の一致率が高いことから、この新しいオーバーラップの分類の妥当性が示唆された。それでは、以下にその新しい分類とその定義を示す。

1) 招致介入

現在の話し手が質問、依頼、確認などを行うことによって、次の発話者がそれに答える形でオーバーラップするものがこれにあたる。つまり、現在の話し手が次の話し手を選択しようとした時に生じる。例えば、

例(2)

C:—きにそっててっぺんまでいってください*さい
D: *はい

Cが「いってください」という依頼を行った結果、Dがそれを受諾するという形になっている。

今回調べたオーバーラップのうちの30.7%がこのタイプに分類された。

2) 協調戦略的介入

このタイプに分類されるオーバーラップは聞いている、理解しているという合図と呼ばれるもので、全オーバーラップ中の53.5%に及んでいる。これはさらに以下の3つのタイプに分類される。

a) 協調戦略的引継ぎ

現発話者が言い始めた発話を途中から引き継いで、単語、文節、文を完成させる。相手が言おうとする内容を引き継ぐものがこれにあたる。

例 (3)

E: 一のすぐしたにお一*ときゃんぶじょう
F: ときゃんぶじょう

FはEの発話を遮るつもりはなく、Eの言わんとすることを引き継ぐことにより、その発話内容への理解と了解の意をあらわしている。

b) 同語反復

現発話者の発話の一部を、確認や了解を表すために復唱する。ただし、同義的な表現を用いた場合もこれに含めることとする。

例 (4)

G: 一まよこに*ひだり<>ま<>
H: 一まよこにひだりに

<>は 400ms 以下のポーズを示している。

Gの「まよこに」と言う指示を確認するためにHが「まよこに」と繰り返し、Hが「まよこに」と言う発話をしているときに、Gが続けて「ひだり」と追加説明をしたので、Hも「まよこに」のすぐ後に「ひだりに」と発話することによってGの発話を聞き逃さず、理解したことを表している。

c) あいづち

これには、現在の話し手が addressed term や intonational question, tag question によって次の話し手を選択したときに、次の話し手が現在の話し手の発話の終了する前に話し始めるものが含まれる。次発話者が「はい」「ええ」などのあいづち的行為に相当する発話を行ったもの。ただし、現発話者の intonational question, tag question がなくても、次発話者が「はい」「ええ」というあいづちを行ったものもこれに含める。

例 (5)

I: 一のところから*だいたいじゅうごどくらい
J: 一*はい

Iが「ところから」の「から」の部分にイントネーションをつけて発音したことによって、相手に確認をとるという意味合いを持たせたために、Jが了解を示す意味でオーバーラップしている。これも余分な intonational question の付加による誤解とは捕らえがたい。明らかにIはイントネーションの上昇下降によってJに発話を求めているからである。

3) 戦略的介入

現発話者の話の途中に介入して、次発話者が自分の話を割り込ませるものがこれにあたる。次発話者がその時点でより妥当だと判断した理由で発

話権を得ようとして次発話を介入させる。これは全オーバーラップ中 15.8%とやや少ない。以下のように細分できる。

a) 戦略的介入

詳細な情報を要求したり、現発話者の発話内容に否定的な反応をする、またその否定的な反応の理由を述べる、もしくは現発話者の発話内容をより明確に表現しなおしたりするなどの次発話を介入させることで、現発話者の発話を遮り、対話の主導権を取ろうとするものである。

例 (6)

01 K: 一それでろてんぶろはそのひだりにありますかね
02 L: いやないです+
03 K: +ろてんぶろと{だから}みずたまりのうえ*
04 L: *いわぶろてのがあるんです(け)よ
05 K: いわぶろは*どこころへどこころ*へんに
06 L: 一*じゃない
07 L: 一*いいわぶろてゆうのはにとうのぞうの
08 K: はい+
09 L: +みぎうえ
10 K: にとにとうのぞう*{おわ}{お}{あ}<>{は}
11 L: 一*あにとうのぞうと<>あのわかりまわります
12 K: えにとの*{ちょ}
13 L: 一*ほうくうごうのあとちのうえのほうに<>いわぶろ<>てにとにとうのぞうてのが<112>あるんですけど

これはKの地図には「ろてんぶろ」という指標物があるが、Lの地図では「いわぶろ」という指標物しかないと言う場面でKとLが互いの地図の食い違いを話し合っているところである。まず、04でLはKの発話を遮り自分の地図には「いわぶろ」というのがあることを伝えている。05でまたKが「いわぶろは」と言いかけたのを遮り、「じゃない」と発話したが、Kが言い止めず、続けて「どこころへどこころ」と言ったのでLの「じゃない」と言う発話は対話の中で無視され、05、07の質問と返答という対話に吸収されてしまう。

しかし、12、13を見ると、Kの発話の途中からLが介入したことでKが話し止め、Lは自分の地図の説明を行う。

b) 戦略的引継ぎ

相手が言い始めた発話を途中から引き継いで、単語、文節、文を完成させる形で次発話を介入させるもの。ただし、現発話者が言おうとしていたこととは異なるもの、付加情報を伴った発話によって

引き継ぎ、相手発話の補足、言い換えをしたもの。

例(7)

M: -をとおっ*て-

N: *て♡でそれによするにはんとけいまわりに行く

NはMの「とおって」の「て」の部分と同時に発話することによって、「とおって」というMの発話中の文節を完成させる形でオーバーラップしている。しかし、それに続くNの発話はMの「くるっとうえがわをとおって」という発話を「よするにはんとけいまわりに」と言い換えたものである。相手の発話を引き継ぐと言う面では a.Strategic interruption よりも相手に対して協調的であるが、発話意図としては同じである。

5 介入発話出現モデル

上記のようにオーバーラップにはさまざまなパターンがあり、それぞれが違った方式で話者交代や会話の進行に影響している。このことから、従来の Sacks, Schegloff & Jefferson(1974) によって提唱されているターンテイキング理論による話者交代の制約は実際の対話ではより緩いものであると考えられる。対話中の TRP 以外でも話者交代は生じるし、次発話者は対話に参加することができる。従って、話者交代のメカニズムを記述するにあたって、オーバーラップ現象を説明し得るモデルの付加が必要となる。そこで、オーバーラップによる会話のインターセプションをモデル化した介入発話モデルを提案する。

(ルール 1) 現発話者主導の招致介入

現発話者の誘引によって次発話者は現発話者の発話の途中で話し出すことができる。すると、現発話者は話し止め、次発話者に発話権が移る。

(ルール 2) 協調戦略的介入

現発話者の誘引がある無しに関わらず、現発話者の発話中に、次発話者は様々な聞いている、理解しているという合図を挿入することができる。

(ルール 3) 対話相手主導の戦略的介入

現発話者の誘引がある無しに関わらず、現発話者の発話中に、次発話者は現発話者の発話を遮ることができる。そのとき、相手より長く話しつづけたものが発話権を得る。

Levinson(1983) は会話の順番取り規則のルール 1 の失敗は現在の話し手が予想外な付け足しをした

ときに、次の発話者が発話末を取り違えて、次発話者が話し出してしまったときに起こるオーバーラップであるとしている。しかし例(2)のように、現発話者が発話末に何もつけたしを行っていないにもかかわらずオーバーラップは生じるので、この指摘は当てはまらず、会話の順番取り規則ではこの例を説明できていない。そこで介入発話モデルルール 1 を使って例(2)を説明することにする。Cは「-までいってください」という指示を出すことによってDの応答を誘引している。このような誘引があれば発話の途中であっても次発話者は話し出すことができるので、Dはその指示に応える形でCの発話の終了を待たずに発話を開始する。この段階で発話権はDへ移行することになる。

次に例(3)(4)をみると、現在の話し手は次発話者を誘引しておらず、発話を停止してもいない。従って会話の順番取り規則に則れば、次発話者が発話をする余地はない。しかし、次発話者は発話している。これを介入発話モデルのルール 2 を使って見てみることにする。例(3)のFは、Eの言わんとしている内容を予測し、Eの発話を聞き、理解できているということをEの発話を引き継ぐ形の発話をEの発話中にすることで示したものである。例(4)でも、Gの「まよこに」「ひだり」という発話部分を了解したことを示す言葉を現発話者の発話中にも挿入できるので、HはGの発話を反復することでそれを示しているのである。例(5)は現在の話し手が山形ピッチパターンと呼ばれるイントネーション(小磯他,1995[9];堀内他,1996[10])によって次発話者が自分の発話を聞いているか、理解しているかを確認するような誘引を行うことが多いとされる。しかし現発話者はあくまでイントネーションの上昇下降がなされるだけで、発話を停止するわけではない。またそのようなイントネーションを用いた誘引が行われなくてもかかわらず、同様の発話が次発話者からされることがある。会話の順番取り規則では、現発話者が次発話者を指定したとき、現発話者が話し止めたときのみ、次発話者が発話できるとされているが、それでは、このようにイントネーションの誘引がある無しに関わらず次発話者が発話する現象を説明できない。従ってこれも介入発話モデルのルール 2 を適用して説明するしかない。現発話者の誘引がある無しに関わらず、次発話者は聞いている、理解しているという証拠を現発話者の発話中の適当な場所(品詞

によって決定されることが多いとされる、koiso et al.,1998[11])に挿入することができるのである。

例(6)をみると、05 Kの「いわぶろは」に対し、それを遮ってLは「じゃない」と発話をしたが、Kが話し止めず「どこらへんに」という質問を発している。Lは発話を遮ったもののKの方が続けて、より長く発話したために発話権はLに移行せず、Kに留まっている。介入発話モデルルール3の、相手より長く発話した者が発話権を得る、というのがあてはまる。この場合はKの方が長く相手より話しているのでKが発話権を得ている。反対に、12、13の箇所ではLがKの発話を遮った後、Kが話し止め、Lの方が続けて長く発話しているので、Lが発話権を得ている。例(7)も同様にこの介入発話モデルルール3が適用される。NはMの発話を引き継ぐ形で発話を開始し、その後それまでのMの発話を別の表現で発話するという形でMよりも長く発話している。従って、この場合はNが発話権が移行している。会話の順番取り規則ではこれら(6)(7)のような例は暴力的介入とされてルールの適応外だとされてきたが、それでは介入後の発話権の移行が現発話者にあるのか、次発話者にあるのか明示されない。しかしこの介入発話モデルルール3を用いることによって、このような介入後の発話権の移動のあり方が記述できる。

6 考察

ルール1での次発話者の発話は基本的には隣接ベアのセカンド・パートと呼ばれるものがくる。従って、もしオーバーラップが起こらなくても、現発話者は次発話者へ発話権を移行させようとしているのであり、話者交代の流れが阻害されるわけではない。もし、TRPの概念を単語末、文節末、文末に限定しなければ、会話の順番取り規則のルール1に相当する。Levinson(1983)の言う最初に発話しようとして起こる競争や誤解—現発話者が予想外な付け足しを発話末に行ったために次発話者が間違えて早めに話しだす現象—というよりも、現発話者の発話意図を次発話者が先取りして、それに応えることによって生じるオーバーラップと言える。

ルール2は現発話者の発話中に短い発話が挟まれるものである。このようなオーバーラップが起こるときには、現発話者が次発話者のオーバーラップを誘発するような音韻的引き伸ばし、山形ピッチパターンと呼ばれるものを行っていることが多い。

これは相手への確認や質問を音律的により行ったもので、基本的には現発話者は発話権を次発話者に渡すつもりはない。次発話者も確認や了解を示す以上に発話を続ける気はない。全オーバーラップ中の53.5%を占めることから見ても、このタイプのオーバーラップは対話を行うにあたって非常に重要な戦略であると言える。

ルール3は、Sacks, Schegloff & Jefferson(1974)の言うsecond starterが発話権を得るために起こる競合、つまりLevinson(1983)が暴力的介入と呼ぶ概念に近い。次発話者が現発話者にとって代わろうとしたために、または、現発話者が次発話者にとって変わらせまいとしたために起こるオーバーラップである。しかし、単に暴力的介入として片付けてしまうことはできないであろう。なぜなら、このようなオーバーラップが生じたからと言って、対話が一方的なものになったり、対話者どうしの間に亀裂が生じることはないからである。全オーバーラップ中15.8%と、他の2つのオーバーラップのタイプに比べやや少ないが、対話中でのストラテジックな用いられ方から考えれば、決して無視できない機能を持っている。ルール3において出現する一見暴力的に見えるオーバーラップも突発的に生じているのではなく何らかの発生機序を有しているはずである。対話中でのストラテジックな用いられ方から考えれば、決して無視できない機能を持っているこの介入発話は、現発話者の発話に対しどのようなタイミングでオーバーラップされるのか。現発話者の発話にある韻律情報や発話速度との関係を今後検討しなくてはならない。

以上のような介入発話モデルを用いることによって、今までは会話の順番取り規則の適応の失敗もしくは不適応とされてきたオーバーラップ現象を明示的に記述することができる。また会話の順番取り規則の失敗や不適応では説明できなかった現象も会話のターンテイキングを行うための重要な戦略として位置付けできる。会話の順番取り規則と介入発話モデルを併用することですべてのターンテイキングに関わる現象を説明できるようになるのではないかと思われる。

7 今後の課題

本研究ではオーバーラップがターンテイキングの中でどのように生じるかについて記述してきた。しかし、ここで取り上げたオーバーラップの持つストラテジックな機能はオーバーラップのない対

話にも存在し得るものである。今後、統制群としてオーバーラップの少ない会話や遅延条件を設けた対話を比較検討していく必要がある。ターンテイキング理論は対話中のオーバーラップやギャップ、沈黙を少なくするメカニズムを記述しようとしたものである。しかし実際にはオーバーラップを避けようとする無音区間が増加するというようにこの二つの現象は相互に矛盾するものである。オーバーラップとギャップ、沈黙の全体をターンテイキング理論として整合的に説明する理論の構築が望まれる。

謝辞

本研究の作成にあたり、千葉大学 土屋俊先生には終始にわたり丁寧なご指導を頂きました。また、千葉大学 市川薫先生、仲真紀子先生、堀内靖雄先生においては草稿に対し貴重なご意見と暖かい励ましをしてくださいました。さらにデータ観察にあたり千葉大学の学生みなさま、院生のみなさまにお世話になりました。ここに深く感謝いたします。

参考文献

- [1] H. Sacks, E. A. Schegloff, and G. Jefferson. A simplest systematics for the organization of turn-taking in conversation. *Language*, Vol. 50, No. 4, pp. 696-735, 1974.
- [2] S. Ervin-Tripp. Children's verbal turn-taking. In E. Ochs and Schieffelin. B.B., editors, *Developmental Pragmatics*, pp. 391-414. Academic Press, New York, 1979.
- [3] J. Jaffe and S. Feldstein. *Rhythms of dialogue*. Academic Press, New York, 1970.
- [4] H. Sacks. An analysis of the course of a joke's telling in conversation. In J. Bauman, R. & Sherzer, editor, *Explorations in the Ethnography of Speaking*, pp. 337-453. Cambridge University Press, 1974.
- [5] C. S. Levinson. *Pragmatics*. Cambridge University Press, 1983.
- [6] H. H. Clark. Discourse in production. In Gernsbacher. A. M., editor, *Handbook of psycholinguistics*, pp. 985-1018. Academic Press, San Diego, 1994.
- [7] 岩淳子, 榎本美香, 大谷京子, 嶋野健, 土屋俊. 日本語地図課題対話における相手発話中の発話開始現象について. 信学技報 SP98-70, pp. 15-22, 1998.
- [8] 堀内靖雄, 中野有紀子, 小磯花絵, 石崎雅人, 鈴木浩之, 岡田美智男, 仲真紀子, 土屋俊, 市川薫. 日本語地図課題対話コーパスの設計と特徴. 人工知能学会誌, Vol. 14, pp. 63-74, 1999.
- [9] 小磯花絵, 堀内靖雄, 土屋俊, 市川薫. 下位発話単位の音声的特徴と「あいづち」との関連について. 人工知能学会研究会資料 SIG-J-9501-2(12/8) (合同研究会A I シンポジウム '95), pp. 9-16, 1995.
- [10] 堀内靖雄, 小磯花絵, 土屋俊, 市川薫. 自発的音声対話における話者交代の制御に関わる発話末の統語的・韻律的特徴. 情報処理学会情報処理 Vol. 96 No. 21 (音声言語情報処理 96-SLP-10-9), pp. 45-50, 1996.
- [11] Hanae Koiso, Yasuo Horiuchi, Syun Tutiya, Akira Ichikawa, and Yasuharu Den. An analysis of turn-taking and backchannels based on prosodic and syntactic features in Japanese map task dialogs. *Language and Speech*, Vol. 41, No. 3-4, pp. 295-321, 1998.